

「計画はバッチリ！」のしくじりから学ぶ

SGH と WWL での実戦から見てきた希望

学校ではしばしば「計画」が大事にされます。よく生徒には計画を立てることや、計画通りに実行することを求めます。しかし、この「計画」にこそ「しくじり」が潜んでいるようです。『「計画はバッチリ！」のしくじりから学ぶ』と題した第二回は、大阪教育大学附属高等学校平野校舎にて、スーパー・グローバル・ハイスクール（以下、SGH）の研究部長を務める松田雅彦先生にご登壇いただきました。保健体育科の教員として、また主幹教諭、進路研究部長として、さまざまな立場を経験される中で取り組まれた実践を紹介してくださいました。

松田先生が、SGH の実践のために計画し、準備したことは大きく 3 つです。

1. カリキュラムや外部連携などの設計図を作成した（資料①）
2. コンピテンシー評価のメソッドを取り入れ、定量評価をできるようにした
3. 課題解決力、コミュニケーション力、多文化理解力、セルフマネジメント力の「4つの力」をベースに、各項目を目標分析することで、指導（学習）の立ち返るポイントを作った

学習内容やその環境（外部連携）、評価を計画し、特に「4つの力」の合意形成を行ったことで、上手くはいかなくとも、なんとかかなと思っていたそうです。

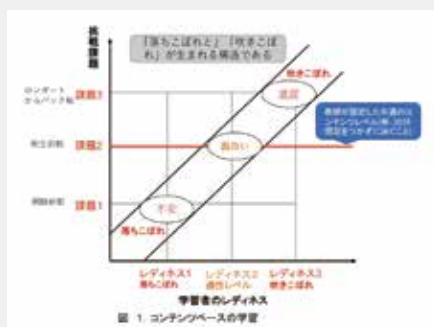
しかし、SGH の1年目は「ほぼ崩壊状態だった」と言います。計画はバッチリだったのですが、課題研究（探究学習）の指導方法が全く見えていない状態で突っ走ったので、生徒や先生の状況にあわせて臨機応変に計画を変更しづらくなっていました。そして、その根本にある原因として、教科書ベースで学習内容をコントロールする「コンテンツベースの学習から抜けきれないこと」にあると松田先生はいいます。（資料②）

従来の学習構造と違い、探究学習で求められるのはコンピテンシーベースの学習になるそうです。これは学習者のレディネスによって、一人一人の挑戦する課題が設定されるということ。（資料③）そのため、①コンテンツにばらつきがでる可能性のある構造である ②その時間の学習が終わった時点で、次の時間の課題が初めて予想される構造である といえます。従来の学習に慣れてしまった先生方にとっては、「学習内容が脱線したり、準備が多岐に渡ってしまうのではないか」「計画自体が白紙になってしまわないのか」など、不安で仕方ありません。すると先生方は、計画をさらに緻密にしたり、コンテンツを充足させようとします。多くの学校で、取り組みが逆戻りする原因として、計画を立てることのもう一つの落とし穴が、準備した内容が目的化してしまう（計画がコンテンツ化しやすくなる）ことにあるのかもしれません。

では、どのようにすると良いのでしょうか？「先生も探究すること」と、松田先生は言います。職員室であえて、探究について大きな声で話すことや、「失敗していいんだ」という雰囲気づくりを行ってきました。そこでは先生



資料①



資料② コンテンツベースの学習構造



資料③ コンピテンシーベースの学習構造

方から『「誰でもできる探究学習」を作った方がいいんじゃないか』という意見が生まれたりしたそうです。結果、先生方で協力して平野メソッドの骨格ができあがり、学年ごとにアレンジできる教材になったそうです。(資料④)

でも「教材を作ると、それがコンテンツになってしまわないの?」という疑問が湧きます。平野メソッドの成功のポイントは、あくまでも生徒の実態に合わせて先生が用意していることです。取り組み1年目のしくじりから「ミニマムリストを作った」→「生徒は各項目を関連させて書いていなかった(ただ書いて埋めていた)」→「関係性を考えるブリッジシートやバージョンアップ版を作った」というように、一つの取り組みから生徒の実態に気づく。そこから分析をして、対策を作っていくことの積み重ねになっています。ついつい、ツールやメソッドという結果に目がいきがちですが、実際には多くのしくじりの上に生まれています。そして、しくじることがあっても、「〇〇な力を身につけて欲しい」と目標としての立ち返るポイント(4つの力)を共有していることで、しくじってもしくじりきらなかったのではないかと松田先生は言います。



資料④ 平野メソッドとして開発した教材



資料⑤ 4つの力

しくじりメモ

例)・しくじるための立ち返るポイント作り

・学習の手立てを、誰でも探究できる職員室

Speaker

Mr. しくじり 松田 雅彦 先生



大阪教育大学附属高等学校 平野校舎 主幹教諭

2015年からSGH(スーパー・グローバル・ハイスクール)を、2020年からはWWL(ワールド・ワイド・ラーニング)の取り組みを中心となって推進。また、学校と地域の新たな連携の形として「スクールコミュニティークラブ」ひらの倶楽部を学校内に立ち上げ、実践に取り組んでいる。